

Title	オムスク観測行(2) (續日食報告號)
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1936), 16(185): 421-424
Issue Date	1936-08-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/167328">http://hdl.handle.net/2433/167328</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## オムスク觀測行 (2)

山 本 一 清

(3)

吾々の汽車は6月12日18時30分に愈々オムスクに着いた。今まで永く同じ列車に乗り合はせた我が日本のオリンピック選手團の人々に手傳つて貰つて、大小の荷物を運び出し、別れを告げて、出迎ひの男2人に連れられ、約4キロの街路をガタガタ揺られながらホテルに行く。宿は Soviet-Sibirskaya Hotel といひ、此の地の一等旅館であるとか。宿に着いて、室内に手荷物など運び入れ、さて、いろいろ今後の打ち合はせをしようとして、驛に出迎えてくれた2人の親切らしい世話人に話しかけて見たところが、豈圖らんや！此の2人は英語もドイツ語も出来ず、只お國言葉のロシア語が流暢であるばかり。尤も、フランス語の極めて僅かな斷片なら判るらしいが、之れでは殆んど何も意志を通じ得ないと同じだ。ホトホト困つて、如何しやうかと、稻葉君と顔見合はせて案じてゐる時、あたかも、先着のポーランド國からの觀測隊の人々が宿へ歸つて來た。そして、ツカツカと吾々の室へ入つて來て、

“How do you do, Professor Yamamoto? My name is Witkowski!”

といふ御挨拶だ。立派な英語である。そこで吾々は急に元氣を回復し、大喜びで、こちらの事情を話し、此のオムスクでの模様や、日本のこと、ポーランドのことなど、小1時間も話し込む。——キトコフスキ博士の名は今までに聞いたことがある。ポーランドの西都ボズナン大學教授であるが、今回の日食にはポーランドの天文大御所 Banachiewicz 博士を總帥とする四つの遠征隊の一つを主裁して入露し、オムスクに來たものである。(他の2隊はギリシヤに、1隊は J. Olczak 博士を主とし我が日本にやつて來た)。キトコフスキ博士は Koebke 博士と、Stenz 氏との2人を連れた3人組で、自分の顔を見るや否や、

“Professor Yamamoto! You arrived late!” (貴君たちの御到着は遅かつた！)

と言はれたが、あとで聞いて見ると、此のポーランド隊だつて、わづか1日

前の、6月11日にオムスクに着いたのだといふ。

(4)

此の日、日がトツプリ暮れた頃、観測場から宿へ歸つて來た5人の英國觀測隊員があつた。此の隊長はスコットランドのアバディン大學教授カロール博士であるし、其の下に少壯キリヤムス君とマクベイン女史、それに助手としてラツク氏とアレキサンダ氏とが居る。——自分はカロール氏には今より14年前から2—3度會つたことがある舊知の友である。カ氏もチャンと覚えてゐて、

“Mr. Yamamoto. 御機嫌よう。久しぶりですね！ 貴君とミセスとはキールソン山天文臺で御目にかゝりましたことを記憶してゐます…………”

“1924年には、貴君が居られたケンブリヂ(英國)でも御目にかゝり、御馳走を頂きました”

“おい、あの時は貴君は獨り旅でしたね。奥様は御達者ですか？”  
といふ挨拶であつた。

英國からは今回の日食に三つの觀測隊を派遣してゐる。第1は日本へ來たストラトン博士の1隊、第2は此のオムスクに來てゐるカロール氏の隊、第3の隊はグリニチ天文臺のグリーヴス博士等で、ギリシヤに行つてゐる。カロール氏は先年ストラトン博士の次席としてケンブリヂ太陽觀測所副長だつたこともあるが、今は前記アバディン大學の“物理學教授ですから”と自ら言つて居る。

こうして、ジビルスカヤ・ホテルには英國5人、波國3人、日本2人(後には3人となる)で、合計10人の“外國の天文家”が宿泊し、ソ國官營“イントリウスト”の御世話になつてゐる。特に吾々10人ばかりのために、モスクダ政府は1人の世話役を派遣して來てゐるので(其れは、先刻、驛頭へ吾々を迎えに來て呉れたうちの1人なので)あるが、そうした厚意に拘らず、どういふわけか、此の特派員はロシア語以外に、少しも外國語が出来ないのは不便である。

(5)

ホテルに第1夜を明かした吾々は、翌13日から、毎朝、専用バスに送られて、英國や波國の人々と共に、市の北郊の一集約農場に行くのである。

毎日、朝食は大抵8時頃。バスの出発が8時半から9時。農場には、ロシヤの観測隊が多数ゐて、英國隊や吾々のために、種々世話をしてくれる。——波國の天文家たちは、吾々の観測場よりも1キロばかり市街に近い農業大學の構内に器械を据えてゐるので、ロシヤ隊との交渉は幾らか少いらしい。吾々は一番あとに到着した御蔭で、観測場では、英ソ兩隊から種々厄介になる。まづ、朝、宿から持参した小荷物や辨當は、英國隊の控へ室である大型テントの中に置き、食事の時も、御茶の時も、皆、英國人たちと一所で、同じサモワールの湯を別け合ふ。又、ソ國の學者たちには、観測小屋の建設や、大工の世話、暗室の出入等々、観測準備技術上のいろいろの助力を依頼すると言つた様子である。

### (6)

ソ國の天文家たちは、レニングラード市の國立プルコワ天文臺からバラノフスキ Balanowski 博士夫妻、ドイツ A. N. Deutsch 博士、リングアウル Lingaur 博士其の他少壯助手數人が來て居り、又、プルコワ天文臺の出張所として、クリミヤ半島に有名なシメイス天文臺のシャイン G. Schajn 博士夫妻とアルビツキ V. A. Albitsky 博士等が來てゐる。シメイス組は一つのバラツク内に1臺のシロスタクを置き、其れに附いた二つの平面鏡から光りを二つの細隙分光寫眞儀に受けて、太陽の閃光スペクトルや、コロナのスペクトルを撮影する計畫と見える。プルコワ組はバラツクを二つ持つてゐる。其の一つはバラノフスキ氏とドイツ氏とが擔當し、中に10糎級の兩筒寫眞機を据え付けてゐるが、之れは新に購入したばかりで、未だ試験も済んでゐない望遠鏡で、目的は水星内側の未知遊星を搜索するのだと聞いた。他の1バラツク内には、コロナの變動を研究するため、ソ國で特に設計製作した6ケのユニフォーム機の一つで、焦點距離5米のカメラであるが、珍らしく對物レンズ（口径10糎）が移動するやうになつてゐる。

ソ國の人々は、共通に、暗室及び物置きとして立派なバラツクを今一つ持ち、尙ほ休息や、夜間の當直用として、小型のテントを五つ六つ、場内の空地に建ててゐる。其のうちの一つは外部との通信や、放送所としての設備を有ち、新聞記者なども度々これを利用してゐる。他の地方にゐる観測隊の模

様や、天氣の状態などは、此の設備によつて知り得るのである。

ソ國の観測隊は上記の如き大掛りなものであつて、全體の指揮者はバラノフスキ博士である。

### (7)

英國の観測隊は、観測用のバラツクも、雑用の大型テントも、皆わざわざ本國から運搬して來たもので、其の他、工作道具から炊事具や食料に至るまで、實に周到な準備をして來てゐることは、さすがにストラトン博士の直弟子たちだと肯かれる。

英國隊の観測プログラムは非常に複雑なものであるが、自分は幾度も此のバラツクの中に入つて説明を聞いたので、ほど要點をつかみ得た。英國隊の観測目的は三つで、其の第1は5個のプリズムを對物的に置いて、コロナ・スペクトルの赤外部を撮影すること、之れはキリアムス君の擔當である。第2は大きさ15極級のプリズム2個と、2枚玉レンズと、フアブリ・ペロ1干涉板とを並べて、コロナの綠色光線により内部運動の模様を撮影すること、之れはカロール隊長自身の擔當である。第3はエシエロン格子によつて大きく擴大した分光儀(恒溫油槽)により、閃光スペクトルを巧妙な仕掛けで毎秒1枚づつ撮影する装置で、之れはミス・マクベインの擔當である。そして此の3種の観測全體のために35極級のシリロスタ1臺を窓外に据えてゐる。器械が複雑してゐるので、カロール氏等は日食の直前まで整調や修理等に忙殺されてゐた。(つづく)

